

# 暮らしを支え幸せを届ける

## 若手が活躍 能登の移動販売



鮮魚を届けるため里山をいく（鴨川地内）



農具と漁具の修理のため、舟屋の里を進む（内浦長尾地内）



山あいの地区に明るい音楽が聞こえてきました。移動販売車が来た合図です。音楽が止まるとちらほらとお年寄りの姿が見え、若い店主との会話を楽しみながら笑顔で買い物をしています。

そんな風景が能登町で頻繁にみられるようになりました。買い物に困るお年寄り、いわゆる買い物弱者の元を訪れる若い店主たちの奮闘を追いしました。



# 「困った」を「良かった」に 移動鍛冶で人と人をつなぐ

メロディーを流しながら町内を巡る赤い一台のトラック。今年で創業110年目を迎えた宇出津の鍛冶屋「ふくべ鍛冶」の四代目、干場健太郎さんの販売車による「移動鍛冶」です。

干場さんは漁具や農具を作り、修理をしている「野鍛冶」です。移動鍛冶を始めたのは2015年の4月です。鍛冶屋を継ぐ決心をして、勤務していた能登町役場を退職。父・勝治さんに弟子入りして店頭に立つなかで、重い



拠点で行われている販売。お年寄りからは「週一回しか無かった買い物の機会が増えて嬉しい」との声

鍬などの道具を持ち、バスに乗って苦勞をしながら修理に来る、多くのお年寄りの姿を目の当たりにしました。「これは大変だ、何とかできないか」という危機感を覚え、「お客さんに来てもらうのではなく、自分が回っていくほうが、移動手段が限られた人にとって良いのではないか」と考えたのが始まりです。「実は初代もやっていたんです」と健太郎さんは店の歴史について教えてくださいました。大正時代、初代店主も馬車に鍛冶道具や商品を積み、集落を回りながら修理・販売をしていて、遠くは輪島まで回っていたそうです。移動販売は自動車の普及などで二代目が引き継いだときに休止。専用の車もなく、販売ルートも白紙からのスタートでしたが、集落を巡ってきた店の歴史が移動鍛冶を再開する四代目の背中を押しました。移動鍛冶は毎週木曜日の午前中に内浦地区を、金曜日に能都と柳田地区を定期的に巡回します。地区の拠点、集会所や公民館などを回ります。個人宅に訪問するのは、個別



イベントで移動鍛冶を行った時の商品。イベントでは会場で刃物を研ぐサービスも行う。普段の移動販売車では製品約100点と食料品約30点を揃える



行商鑑札。大正当時初代が行っていた証

に要望があったときのみとされています。「私が拠点に行くことで家から出て、近所の人と話すきっかけになれば」と、一人暮らしのお年寄りが多くの人とふれあうことにつながることに思いを巡らせています。「弁当や鳥の照り焼きを売って欲しいなど、リクエストが入ることがあります」。鍛冶屋の商品だけでなく刺身やお惣菜、お菓子なども届けることもあるそうです。ふくべ鍛冶の移動販売では、普段の買い物に困る人のサポートにも力を入れていて、重い米や箱に入ったスポーツドリンクなどを届けたことも。「依頼されることは嬉しいので、要望にできるだけ応えたい」と、笑顔で干場さんは話します。

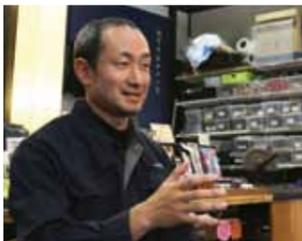
町の工場や店舗にも移動販売車で

駆けつけプロの現場を支えています。工場などで使う道具や刃物は精度や強度が要求され、使用頻度の高さから磨耗も激しく、換えの効かない物も多いため現場での修理には大きな需要があります。修理中に聞いた悩みをヒントに使いやすい道具を研究し商品にすることもあり、移動鍛冶は「最新線の研究室」としての役割も担っています。移動販売車は雪に弱く12月から3月にかけては移動鍛冶は休止に。「冬こそ困る人が多くなるのに」と自然の力の大きさに悔しさを感じているそうです。

健太郎さんが信念、そして自身の役割としていることは「困ったを良かったにする」こと。移動鍛冶で道具そのものだけでなく、その道具と共に生きる人々の生活を支えます。



三代目の勝治さん（左）の技術を継承する四代目。どんな道具でも直せるのは野鍛冶だけ



### 「ふくべ鍛冶」四代目 干場健太郎さん

1980年、能登町生まれ。大学では経営学を専攻し能登町役場で勤務。2015年退職し「ふくべ鍛冶」を継ぎ現在に至る。宇出津で父、妻、子2人の家族5人で暮らす。

次代を担う鮮魚行商人  
食卓を豊かに、心も豊かに



店で丁寧に調理される焼き魚。調理した魚は手間がかからず人気

今朝とれた魚の顔ぶれを眺めながら買うのも楽しみの一つ



刺身や下処理をした魚。温度管理ができる陳列棚を導入している。

その日採れた魚をSNSを活用して発信



店内で行っている魚の加工。午前中に移動販売の準備を行う

**宇** 出津の鮮魚店そばに停められ、た行商用の軽トラックに商品を並べる若い男性。明治45年創業の「したひら鮮魚店」の四代目、下平真澄さんです。

100点が所狭しと並べられます。意識しているのは、やはり行商に行くお客さんの多くは買い物に困るお年寄りや少人数の家が多いこと。従来の移動販売のスタイルのように魚を一本で売るのではなく、下処理をしてパックに詰めた、調理の手間がほとんどかからない商品にしています。

「子どもたちに魚屋さんだ、と声をかけてもらえるんです」と徐々に移動販売の活動が定着しつつあることが喜びです。力を入れている下処理済みの魚など、手軽に調理できる商品は、お年寄りのみならず、子育て世代などの若い世代にも広がりを見せ始め、新たなニーズを生み出しています。

「目標は一週間の食卓に何度も魚が並ぶ生活」と話す下平さん、熱い想いを胸に今日も移動販売車を走らせます。

「買いたい物に行けないお年寄りなど新鮮な魚を食べられない人にも美味しい魚を食べて欲しい」と、2015年に移動販売を始めました。能登町の山間部を月曜日から金曜日までの週5日、一軒一軒回っています。「繊細な温度管理が必要な商品である魚を新鮮なまま食卓へ」という下平さんの思いが込められています。

荷台には刺身や切り身、自家製のフライや焼き魚など約



「したひら鮮魚店」四代目 下平真澄さん

1987年、能登町生まれ。大学では経済学を専攻し、富山県の食品加工工場勤務を経てUターン。後を継ぎ現在に至る。宇出津で妻子と家族3人で暮らす。

信用金庫の窓口もやってくる

移動店舗車「くりん」号導入

10月17日、宇出津港いやさか広場で、興能信用金庫の移動店舗車「くりん」号の導入式が行われました。くりん号は、能登の方言「来る」が由来で、親しんでもらえるよう名づけられました。窓口サービス業務が行えるほか、ATMを備えた車両です。

式では持木町長、興能信用金庫の蔵下常務理事がテープカットし、店舗の統廃合によって不便が生じる奥能登2市2町の利用者の利便性向上に期待を寄せました。



現金自動預払機(ATM)を完備



支店窓口業務を行える



テープカットを行い出発を祝う

支援制度のご案内

あなたの力が地域の課題解決に町は、新たに頑張る方を応援します

助成制度

能登町創業・継承支援事業補助金

金融機関と連携し、町内で創業する新規事業者や既存事業の継承者を支援する制度です

☎ふるさと振興課 ☎62-8532



助成条件

- ①新事業所等の開設に必要な資金に充てるため、町内の金融機関から融資を受けること
- ②町に住所を有している人で、かつ、生活の実態があること（見込みの者を含む）

補助金額

- ①「新事業所等の開設、拡充や拡大等に必要な経費の1/2に相当する額」または「融資額」のいずれか少ない金額、最大300万円
- ②対象融資の利息の1/2に相当する額、最大10万円  
(利息補助期間は3年間、最大30万円)

相談窓口

能登町ふるさと振興課

町での起業に関する窓口。各種助成もこちらで相談を受け付けます。  
☎62-8532

石川県産業創出支援機構 (ISICO)

起業や新分野進出の支援をはじめ経営、技術、情報化など幅広い企業の問題解決をサポートします。  
☎076-267-1001

# 能登町 顕彰表彰

11月3日、能登町が行う表彰の中で最高位に位置づけられる「能登町顕彰条例に基づく表彰」が役場能都庁舎でありました。保健衛生、産業・自治、産業の各分野で活躍し、長年にわたり町の発展に力を注いだ3人が表彰を受けました。



## 【保健衛生】 舩谷一宏さん (70) = 松波

舩谷さんは、昭和57年に父の後を継ぎ舩谷医院院長となって以来、永年にわたって地域のかかりつけ医として毎日の診療や往診を積極的にこなし、地域の方々との信頼関係を構築されました。内浦訪問看護ステーション開設時には、地域の開業医のまとめ役として訪問介護の必要性を説き、利用促進を図る等、地域医療の発展に尽力されました。

町の保険事業でも、幼児健診、予防接種や健康教育の講師等も積極的に協力いただき、福祉分野では内浦町社会福祉協議会会長、同介護保険運営協議会会長などを歴任。校医としても永く務められ、企業の産業医としても活躍。医療に留まらず、福祉・介護・教育・産業の多方面にわたる貢献は多大です。



## 【産業・自治】 山本一朗さん (享年68) = 宇出津山分

故 山本一朗さんは、平成元年10月から15年4ヶ月間旧能都町観光協会会長を、合併後能登町観光協会会長を平成25年4月からの3年間務められ、通算18年4ヶ月間の永きにわたり、町の観光振興に尽力されました。

特に、地域の特産品の開発、観光PR活動やイベントの企画立案、運営等に積極的に携わり、交流人口拡大を目指す町の観光客誘致に多大な功績を遺されました。

平成8年3月に旧能都町議会議員に当選。能登町議会議員を平成22年10月に勇退されるまで通算4期14年8ヶ月間という永きにわたり、豊富な経験と卓越なる識見をもって、地方自治の発展に貢献されました。



## 【産業】 中本安昭さん (80) = 鮭尾

中本さんは、平成8年に宮地・鮭尾地区の有志に呼びかけ、「春蘭の里実行委員会」を結成し会長に就任。以降21年にわたり、会員をまとめ、牽引し続けています。若者の回帰と集落存続のために取り組んだ農家民宿は約50軒にまで増え、県内では最大の農家民宿群を形成しています。

現在300人規模の修学旅行も受け入れが可能となり、地域の活性化や定住・交流人口拡大に多大な影響を与えています。地区や町への貢献は計り知れず、取り組みは、地域再生のモデルとして全国から注目されています。

里山に自生する山菜や花、キノコなどを紹介する刊行物の監修を行うなど、森林環境に造詣が深く、自然体験プログラム等で子ども達に森づくりの大切さを伝える活動も行っており、その功績は町民の規範となるものです。

# 平成29年 秋の叙勲

平成29年秋の叙勲、褒章が発表されました。能登町からは文化、消防、防犯の各分野で、その進展に尽くしてきた3人が栄えある受章となりました。受章した皆さんの功績を紹介します。

## 【瑞宝双光章】

### 山田芳和さん (73) = 波並

「真脇遺跡を発見し、全国的にも貴重な町の歴史遺産の調査・保護に携われたのが幸せ」と振り返った山田さん。発掘調査が開始された昭和57年から調査団の調査主任として手腕を振るわれ、平成元年の国史跡指定、平成3年の出土品国重要文化財指定に貢献するなど、発見から調査・国史跡の指定まで一貫して尽力しました。

平成17年3月に能登青翔高校の教頭として定年で退職するまでの38年間、教員として教育・青少年の育成に努めました。職務の傍ら昭和50年より旧能都町、能登町文化財保護審議会委員、平成19年からは同審議会長を務めるなど、長年にわたって地域の文化財の保護・普及活動に貢献しました。



## 【瑞宝単光章】

### 瀧平 武さん (72) = 小間生

昭和44年1月に柳田村消防団員として拝命以来、平成21年3月までの40年以上の長きにわたり常に消防人としての職責の重大さを自覚し、積極的に任務の遂行にあたりました。平成14年1月より旧柳田村分団長、能登町消防団分団長として、平成19年4月からは能登町消防団副団長に昇進し、災害現場においては適切な状況判断による指揮統率で被害の軽減に努めました。

「若手が大切、育てて地域の防災を担う姿が嬉しかった」と笑顔で話す瀧平さん。豊富な経験と卓越した行動力を持って、特に団員の育成指導や防火思想の推進に尽力しました。



# 平成29年 秋の褒章

## 【藍綬褒章】

### 石田正榮さん (82) = 鵜川

「間違ったことが大嫌い」と話す石田さん。この信念のもと現在まで44年間防犯活動に取り組み、鵜川地区防犯委員長や能登町地域安全推進委員会総代を務めるなど地域の安全を守り続けてきました。活動は不審者がいないか、児童の見守り活動やお年寄りへの声かけ活動にとどまらず、悪質な訪問販売への注意を呼びかける看板を設置するなど、予防・啓発活動にも尽力しました。

「入学から卒業まで見ていると我が子のように思えてくる、子どもと交わす毎日の挨拶で私も元気をもらった」と、長年にわたる活動は子どもたちの成長と笑顔がなによりの支えだったと振り返りました。

